

## トルコ語オノマトペにおける子音の分布

菅沼 健太郎 (九州大学大学院)

本発表ではトルコ語におけるオノマトペ、特に日本語オノマトペにおける *gata gata* のような一つの語幹を重複した形式のものを対象とし、語幹内の子音の分布を有声阻害音か無声阻害音かという点と、調音点はどこかという点の2点に着目し明らかにし、さらになぜそのような分布になるのかを分析する。

重複する形式のトルコ語オノマトペは(1a,b)に見るように副詞として動詞句を修飾し、また語幹の音節構造によりおおまかに(2)~(6)のグループに分けることができる。

- (1) a. *fis fis konuştular.*  
ヒソヒソ 話す.3rd.pl.past  
b. *lıkr lıkr su içti.*  
ゴクゴク 水. acc 飲む.3rd.sg.past
- (2) CVC ex. *fis fis [fɯs fɯs]*
- (3) CVCV ex. *piti piti [piti piti]*
- (4) CVCVC ex. *lıkr lıkr [lɯkɯr lɯkɯr]*
- (5) CVCCVC ex. *çıldır çıldır [ʃɯldɯr ʃɯldɯr]*
- (6) CVCC ex. *hart hart [hart hart]*

今回はこれらのオノマトペの語幹において最も左端に現れる子音（第一子音、C1）と左端から数えて二番目に現れる子音（第二子音、C2）（先程の *gata gata* を例にとると、g:C1、t:C2）の分布を明らかにする。

しかし、(6)の形式のオノマトペは語末においてC2と、それに続く別の子音がclusterを形成している。トルコ語では語末に現れることができる子音のclusterには制限がある。そのため、C1とC2の分布を分析する際に、語末の子音のclusterにかかる制限がC2に影響することを考慮しなければならない。また、詳しい分析はまだしていないものの、語中における子音のclusterにも制限がある可能性がある。そのため今回は語中、語末においてC2が他の子音とclusterをなしている(5)と(6)は対象外とし、(2)~(4)のCVC、CVCV、CVCVCが語幹であるオノマトペのみを対象に、C1とC2の分布を明らかにする。

まず、C1とC2各々に現れる子音を有声阻害音であるか、無声阻害音であるかに着目し分布を見てみると、以下の(7)と(8)のような特徴が明らかになった。（以下では、例が少なく、非生産的であると思われる形式の左に?\*の印を、存在しない形式に\*の印をしるした。）

- (7) [voice]の値が一致している形式は非常に多く、一方、一致していない形式は非常に少ない。  
*cav cav [ɕav ɕav] fis fis [fɯs fɯs] ?\*hav hav [hav hav]*
- (8) C1VC2 語幹のオノマトペ(2)において、C2が閉鎖音である場合には、無声音でなければならない。  
*cak cak [ɕak ɕak] gup gup [gup gup] \*cag cag [ɕag ɕag] \*gub gub [gub gub]*

また、C1とC2各々の調音点はどこであるかに着目して分析すると、(9)のような特徴があることがわかった。

- (9) C1とC2がともにLabial、もしくは、C1とC2がともにDorsalという形式は非常に少なく、その一方でC1とC2がともにCoronalという形式は多く存在する。  
*?\*paf paf [paf paf] ?\*kıkır kıkır [kɯkɯr kɯkɯr] cızır cızır [ɕɯzɯr ɕɯzɯr] tıs tıs [tɯs tɯs]*

このようにCoronalのみが他の調音点とは異なり、特別な振舞いをするということは多くの言語で報告されている普遍的な事実であり、トルコ語オノマトペのC1とC2に着目した際に見られる分布は、この普遍的な事実がトルコ語オノマトペにおいても言える事実であることを示している。